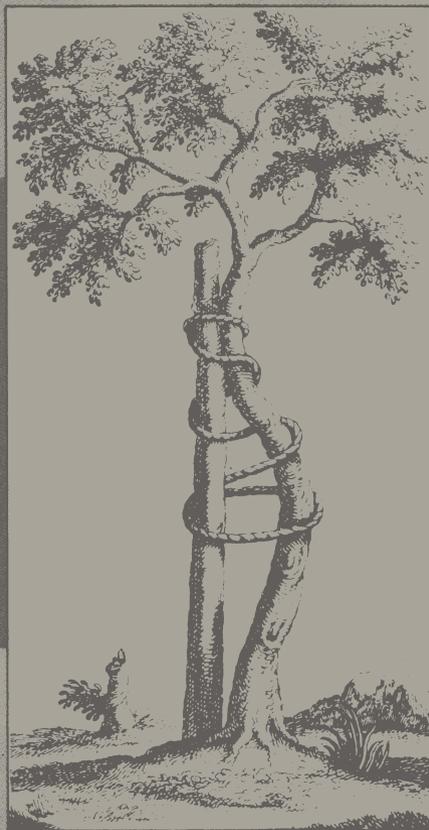




ふるさと



(昭和51年11月)



目次

1.	御挨拶	宮本 銈造	1
2.	“医局”とは	村上 隆一	2
3.	卒訓主任として	富士川 葉輔	4
4.	「北から南から」		6
5.	留学のすすめ	竹田 毅	16
6.	同窓会新入会員紹介		19
7.	新人紹介		20
8.	編集後記		26



御挨拶

同窓会幹事長

宮本 銚造

(二十七回生)

同窓会の幹事長を引受けて一年、何をすることも無く、次期の幹事長に引継ぐことになりました。

一応お引受けした時点では、何とか少しでも現状を打開しなければと思つてみましたが数回の幹事会で、これは仲々大変な仕事だと感ずるようになりました。その組織の不明確さ、その行事のまとまりのなさ、そして金のなさ、どこからどう手をつけて良いのやら、放り出した心境でした。

現在、在局していて常時顔を合わせている医局員と、医局を離れて常日頃は直接の接触もなく、個軍奮闘している先生方が異つた立場にありながら同じ傘の中に同居して、一年一回集つてみてもやはりすぐには融け合えないのも無理のない話であろうと思ひます。

私はこの所は、全く2つに分離してしまつた方がすつきりするのではないかと考えています。そして年1回の総会は、医局と同窓会の合同の会として、医局から同窓会へ、同窓会から医局へと目を向け合い、お互の交流をはかる行事を設け、且つ懇親を行う方がより自然ではないかと思つております。

そこで、手はじめに同窓会規約に手をつけて見ました。今の規約が出来た頃は、医局を卒業して外に出ている先生方も数少く、医局員の数も少く、絶体的な権力をもつていた教授のもとで皆が肩を寄せ合つて生きていかなければならなかつた時代で、殆ど規約そのものも必要としなかつたのではないかと思ひます。しかし今はその世帯もより大きくなり、現在のままでは何となくもの足りない点が多々見うけられます。

しかしいざ新しいものを作るとなると非常な勇気が要ります。よその医局のものも取り寄せて見ましたが、どれもこれが良いと言えるものはありません。幹事の一人、奥島君に草案を作つて貰い、皆であれこれと叩いてみました但未だにこれで良いと言う線が出て来ません。

総会迄には一度評議員の方々にも集つて戴き衆智を窺つてみたいと思つておりますが、多分今回の総会で日の目をみることはないだろうと思ひます。

今回も又今迄と同じ形式で総会が行われます。幹事長として誠におはづかしい次第ですし、又お詫び致さねばならないと思つております。

今後吾々の同窓会が、人もうらやむような同窓会に発展することを切に祈つております。

“医局”とは……

村上隆一

(四十五回生)

前任者・宇沢充圭先生の跡を継いで医局（教室）の仕事をするようになって早半年を迎えようとしている。この職について、今まではあまり深く考えてもみなかった「医局とは何か」という問題に直面した。医局は何のためにあり、私は何のために仕事をするのであろうか。そして何故こゝも医局嫌いの医局員が多いのか。他の学部に類をみないこの多数の医師の集まりである医局とは何なのであろうかと。

医局は教育・研究・診療の中心であり、大きな権威の場であり、そして医局員相互の利益を守るための組織である。しかし、それがある特定の人々のみの利益の場であると考えられる所に誤解が生ずるのではないであらうか。学年が上になるに従ってこの意識が強くなり、それでは自分も……と他人の迷惑など一向に顧みることなく自分の果すべき義務を忘れ、利益と権利のみを主張し追求する人々が増加している。人事異動で少しでも不利な立場になると医局（運営委員会）に怨みを残したり、または厚顔にも医局（運営委員会）の意向を無視したりする。その人の陰で不満を募らせている何人もの医局員を踏みにじつてまで。

このような人が多くなり人事が膠着している現在、これを打破するためには思い切った処置が必要となり、他科で行なっている所もあると聞く「フリー・マーケット」にしてはどうかという意見も出てくる。六年間のレジデント教育を終わり、一般整形外科を充分に身につけた医局員が個々に病院と契約して就職するということになれば、運営委員長の仕事の大半はなくなる。個人にとつても自分というものを評価して受け入れてくれた病院の大半はなくなる。個人に就他院への移動がなくなることによつて現在弊害の第一といわれている予後調査ができないということもなくなる。家族を連れてのジブシー生活もなくなり、

“人生の設計”もできるようになる。確かに良いことづくめのようではある。しかし、これとてもまた弊害を生むのではないだろうか。医科大学・医学部が増えた現在、あと五年もするとその影響も出てきて、十年もすれば医師が都会に溢れ、大学にも居れず、それかといつて受け入れ側の病院も定員一杯となり、どこにも行けないちゅうぶらりんの医師が生まれて来るのではないだろうか。このような例が生じたときレジデント教育を行なつた医局は権利を主張するそのような人々から大きな反感を買うのではないか。せつかく築き上げてきた家庭的暖かさ（これを逆に“ぬるま湯”と非難する人もいるが）を捨ててまでそれに走つてよいものであろうか。それとも“家庭”というにはあまりにも規模が大きくなりすぎたか。

こう考えてくると、何故レジデント教育をするのかという問題も出てくる。しかし、これは大学病院の義務であり、社会に対する良識であり、塾を愛する心であろう。レジデント教育は私の触れる所ではないが、もう一度根本的に考え直す時期に来ているのではないだろうか。現在のようレジデントを人的資源としてその病院の戦力として出張させている限りレジデントの間にも種々の不満が出てくるのは当然である。レジデントはあくまでレジデントであり、出張期間が余りにも長すぎると思う。インストラクター以上で関連病院の戦力を固め、レジデントは戦力としてではなく、教育を受けに行くのだという機構を作るためには、現在の教室構成員のインストラクター以上の数では関連病院があまりにも多すぎる。しかし、将来、医師が沢山作られ、医局員も増え、そして開業もままならない時代が来たときに、医局員に充分な活躍の場を与えるにはどうしても現在の関連病院は維持していかなくてはならないのではないだろうか。それにしても出張病院の構成のレジデントの占める割合の何と大きいことであろうか。それぞれの関連病院で十分に時間をかけた診療と、余暇を使つての研究、そしてレジデント教育が何の抵抗もなく行なえる、そんな日の来るのはもうすぐではないだろうか。その時まで現在の病院群を維持し繁栄させて行くのは現在を生きる我々一人一人の義務である。お互いの利益を守りつつ、現在並びに将来に対する義務も充分に果そうではないか。

最後に、来年は「手の外科学会」「東日本臨床整形外科学会」と二つの大きな学会が来ることになった。いろいろ批判もあるうが、学会を引き受けた以上はすかしはできない。教室構成員の総力をあげて自分の果すべき義務を遂行し、立派な学会とし、その中から個人の利益を吸収しよう。「医局」をそして「自分の立場」を考へる絶好の機会と思われる。また、この両学会の成功のためには教室構成員一人一人の努力もさることながら、同窓会各位の御協力がなくしてはそれを望むことはできない。種々の御助言御協力を切に願ひする次第である。

卒訓主任として

富士川 葉 輔

(四十三回生)

今春、運営委員長より帰局を命ぜられた時、日頃の不勉強さがバレて、もう一度フレッシュマンと勉強しなせよということだろうと、古くなりかけた女房と二人の子供をひきつれ、東京の安アパートに戻ったのはこの夏のことです。世の中は甘くなく「卒訓担当」という大役を命ぜられ仰天、玉手箱を開けた浦島さんのような心境で、「ハイ」などと身の程知らずな返事をした自分に気づいたのは数日たってからでした。

お袋はこの話をきき「お前は大変なことをしてくれたね」と、私が大罪を犯したかの如く顔をふせるのを見ると、不安はつのるばかりでしたが、「富士川家には『他人には極端に厳しく、自分には滅法甘く』という立派な伝統があるじゃないか」となぐさめ合い、しばし安堵を得ました。

毎年一〇数人の、それも大部分は将来有望といわれるフレッシュマンが入局し、更に何年か後には毎年八、〇〇〇人も医者が誕生する時代に「卒後訓練」するなど、どうみても僕には資格がありません。家に帰ると「オトウチャン」などといわれる人もいるかも知れないのに「しつかり勉強してください」などととはとても恥しくていえないのです。しかし何もしない内に後悔ばかりしてはいられないので、自分なりに色々考えてみました。

六年間の研修（この期間も間隔はある）により、一人前の整形外科臨床医になることが基本だと思えます。一人前とはどういうことか僕には分かりませんが、一応の知識と技術をもち、かつ「考えることの出来る医師」になることではないでしょうか。「一つの事」を行う時に、単なる思いつきではなく思考過程が非常に大切だと思うのです。では実際にどうしたらいいのか？それが分からないで困っているのです。

私は入室して一、二年目が最も大切な時だと考えています。あるいはこの時期にその人の医師としての一生のパターンがきまってしまうかも知れません。従ってフレッシュマン及び二、三年の junior resident（前期研修医）は苛酷な程しごきたいと思えます。何しろ一生懸命、死に物狂いでやる時期です。そして四、五年の Senior resident になったら自分で考えて勉強して貰います。方向性だけは常に Check し「何故バックのギアで前進が出来ないか」など自分で解明しなくてはいけません。Chief resident になったら下級生を指導しながら自分も勉強する——人を指導することの大変さ、又自分は五年間一体何を勉強したのだろうかと顎然とし必死に勉強する——という基本的なパターンを芯に今肉付けをしているつもりです。人間、「勉強したいなあ」と思う時は、むしろ適当に口先でごまかせる年令になってしまい、本当に勉強をしなくてはいけないという切迫感もうすれているので逆に安心してそう思えるので、もう

手遅れなのです。

現実には、研修期間の五〇%以上一線病院ですごすので、この期間の指導はそれらの病院の先輩諸先生にお願いしております。教室ではこの一〇月より「立休作戦」というのを実施しています。そして一週の内一日でも楽な日があつてはいけない、カンファレンス、抄読会、教育研究会、レクチュア等で毎日々々つらければそれが普通に感じられ、一日でも楽な日があると他の日をつらく感じるのが人間なのではないでしょうか。

しかし現実ではインストラクターの数の少なさ、指導力のなさ、めまぐるしい人事、上級生になるとHauptを行う時間とのかね合い、生活の不安定性など「理論の実際の大きなgap」をつきつけられ「どうしてくれる」と迫られ、つい浮足立つのですが、理想とは程遠くとも研修医もいい意味での「自分のためだ」という自覚をもち、お互に建設的に努力をし、少しでもgapをうめることで五年後、一〇年後には少しづつ実るのではないのでしょうか。

毎年八、〇〇〇人も医師が出てくれば、巷には医師が氾濫するでしょう。しかし優れた医師の後は増えるとは思えません。

我々の教室で研修をうけた人達が全員その数少ないtopclassの医師群を形成していくというわれわれの教室の伝統を今後守っていきたいと思えます。

北から南から



琉球大学保健学部

リハビリテーション教室

教授 斎藤 正也

(専四)

教室同窓会から過分のお祝をしていただき、沖繩に旅立ちして早くも三年六カ月経ちました。

着任の日、四月半ばだというのに、まるで季節感の違う太陽の眩しさと茹るような熱気に戸惑い、案内された自分の教室には椅子一つなく、歩けば靴型が刻されるようなホコリの積った部屋に佇んで、さて、これからどうしたものかと思案に耽った頃が強烈に甦ってきます。

出発に先立って、ある大先輩が「何も心配することはないよ、君は白紙に向って好きな字を書きなさい」といわれた餞の言葉に勇を鼓舞され、只管、猛進してきた歲月のようです。

生来、愚鈍の身にとって幸運なことには、琉大保健学部に塾医学部出身者が十一名在籍しており、これらの優秀な諸兄の物心両面に亘る多大な援助のおかげで、教室開設も極めて円滑に推進できたものと感謝しています。

目下は、五年前から試作を重ねてきた足底荷重分布圧測定器で、歩行時に足底面へ懸る体重分圧の定量化測定と、歩行時足底重心点の移動を記録し細々ながら学会活動が続けています。これ即ち、リハビリテーション医学はヒトの足場を堅めてという概念からで、将来、歩行の総合解析に挑戦するための一里塚と考えております。

十七年前、恩師岩原先生から「君は、腰を落ちつけてリハビリテーションをやってみなさい」と申しつけられた言葉が脳裡に焼き付き、不肖の弟子ながら駄馬に鞭打ち今日に至りました。

最近、慶大整形医局にも新入局者の中からリハビリテーション領域に進出される方がぼつぼつ出ているとの朗報を聞き、時の流れに今昔の感を深め、胸を熱くして喜び、且つ期待している次第です。

やがてこれら俊英の活躍によって、慶大医学部のリハビリテーション部門が揺ぎなき基盤を築きあげる日もそう遠い将来のことではないものと確信しています。美し、形勢図の五〇年を以て一歩前進してやう。

年賀状のメッセージ。

鹿児島県川辺郡川辺町

田部田四八六二の三番地

菊野整形外科病院

菊野 光一郎

(二十八回生)

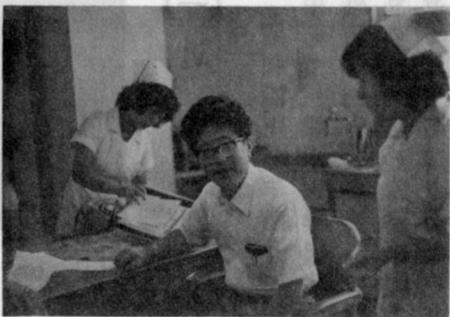
1. 東邦大整形外科を辞して十一年(慶大整形外科を離れて二六年)になります。開業後余期しなかつた種々の事柄に遭遇しながら、何とか段階的な経過の後に、昭和五十年十一月に収容人員を一〇〇とすることができました。またその中には、理学療法部門も整え、理学療法師を中心として、脳卒中をも含めて治療に邁進しています。その間、医師や看護婦等の人員確保に悩まされましたが、幸いに医師については、数年前より東邦大整形外科から定期的に医局員を派遣していただいて、順調な運営をしております。ひとえに西教授の並々ならぬ御配慮と御支援御指導の賜もの心から感謝している次第です。

2. 齢五十の坂を越え、自覚的に体力の衰えを感じる此の頃です。それで体力保持をかねて医師確保ができるようになった数年前より近郊の五〇〇米級の山々に登り、寒蘭採取に精出しています。十一月現在丁度その開花期で、蘭の優雅な容姿と神秘的な色彩と、ふくよかな香りを朝な夕な愛でています。

教室、同窓会への希望

1. 医局を離れて長年月を経ていますので、医局との交信が途絶えがちです。わずかに慶大より発行している一、二の新聞で学内の事情を理解している状態です。それからしますと、一般の学園紛争の余波がまだ続いているような気がします。如何なものでしょうか。また、外部から医局を見ていると傍目八目と見えますが、何かと気になることがあります。教室内はしっくりいっているのでしょうか。

2. 東邦大に十数年勤務して感じたことは、個人的な考えですが、お互いの心の触れ合いが不足していたのではないかといいことです。こういう場合、同窓会のどなたでもいいですから、その連れをとるような方向に持っていけば良かったのではないかと思っています。



(四十二回生)

西 藤 惠一 敬

鎌本市草葉四二一三〇



熊本市草葉町二一三〇

西郷 恵一郎

(四十二回生)

(一) 近況

昭和四十七年四月に熊本へ帰りまして、早くも四年になりました。熊本市の中心で、熊本大学病院の近くに約二百床の病院を運営しています。外科、整形外科、内科、皮膚科の四科で、職員数約一三〇名です。私の専門の整形外科は私その他一名の常勤医師と熊本大学整形外科教室から週に一回バートの医師が派遣され三名でやっております。熊本整形外科集談会、西日本整形災害外科学会等の学会にはかならず出席するようにしております。本年より市医師会の代議員になり、委員会等に出るようになって、医療行政のことを少しづつ理解するようになりました。その他、青年医師同友会(昭和二桁生れの医師の集り)、ロータリークラブ等諸種団体に属し、人的交流も広くなりました。家族は長女(小学五年生)、長男(小学三年生)、次男(四才)、次女(三才)です。妻も熊本の生活に大分馴れてきたようです。

(二) 教室、同窓会への希望

遠隔地にいと医局の現況等の情報が仲々正確に分りません。時々、医局の先輩や友人に電話をして医局の動向を教えてもらっています。また、思わぬところから医局の噂を聞くことがあります。日整会誌、雑誌整形外科、臨床整形外科等の雑誌に慶大の人の論文が出るのを楽しみにしています。入局の方も年々増えているようで喜ばしいことと心強く思っています。慶大整形外科教室の伝統的な家族的、和気あいあいとした雰囲気の中で、教育、診療、研究面はもちろんのこと、豊かな人間性を身につけた良識のある医師が育たれますように願っています。

(三) 最近特に考えていること

私の病院の内科病棟が古くなったので、新しい病院建築の計画を進めております。この実施にあたり、今後の医療制度がどうなっていくのか、如何にしたら医療の理想に近づけるのか等考えています。将来、新設医大の卒業生も加わり医師数は倍増することですが、すでに熊本市では人口一〇万人あたりの医師数が一八〇名近くもあります。それにもかかわらず病院の開設、新築は増えております。最近では医院の建築にも億の金がかかるようです。町を歩けば医院、

病院が立ち並んでおります。今後、医療設備にはますます多大の費用が必要となりませんが、地域集約的医療が組織化され、いろいろの点で合理化され、かつ医療の診断および技術の向上と迅速化がはかれないものかと思えます。ただ、人にはそれぞれの価値観があり、この点、お互いにゆずれ合い、歩み寄ることがまだまだむずかしいと感じます。医道の原点にたちかえり、より広い視野で医療を考える人が多くなれば、これも可能になると思っています。今後、私としては、地域ぐるみの、そして家族的で、心のよりどころとなる病院を何とかして築きたいと思っています。



高知県高岡郡窪川町本町
市北本町三一〇一四

高知県高岡郡窪川町本町

武田

(特) 智

昭和三十三年十月、神宮前で開かれた同窓会を最後に、四国の奥の養父の医院に整形外科を開業して、もう十八年になります。交通網のそれなりの整備もあって、重症患者は殆ど高知市へ出て、地域の老人をつかまえて、数ばかりは多いが、余り神経を使わずにやっています。往時、岩原先生が高齢の腰痛患者に「しようがないな」と処理されていたのが思い出されます。しかし、開業医では、そうも言っておれません。まして、老人ばかり残っている田舎町では、兎も角、解っても解らなくても事態を説明し、「治る、治る」でおし通しています。

当地の産業と申しても、米作と林業が主ですので、御多分に洩れず、振動機障害患者が多発しています。私も早くから当地の営林署の嘱託医をしていた関係から、依頼されるままにこれに関わっています。九月二十三日にはその早期発見と治療ということで、東京まで行ってきました。治療となると、なかなか厄介な問題で、患者の相談相手位のものでしょうか。もう一つ、現在ライオンズクラブに凝っています。この七月から会長に就任し、十月二十四日、十周年記念式典を開きます。折角、会長でやるからにはと勿論、高く止っている歳ではありませんので、何にでも口を出して陣頭指揮、というわけで毎夜東奔西走、会を主催し、他市町の会に出席して一席弁じ、これも一つの生き甲斐でしょう。なかなか、切羽つまってくると、楽しんでおられません。張りが切っています。近ければ、同窓の皆様にも、ひやかしにでも来ていただけるのですが、それが出来なくて残念です。次男は、名古屋保健衛生大医学部三年、長女は、法大史学科一年、次男は地元中学一年。日曜日はゴルフ、ハンディ十八。

昭和三十三年十月、神宮前で開かれた同窓会を最後に、四国の奥の養父の医院に整形外科を開業して、もう十八年になります。交通網のそれなりの整備もあって、重症患者は殆ど高知市へ出て、地域の老人をつかまえて、数ばかりは多いが、余り神経を使わずにやっています。往時、岩原先生が高齢の腰痛患者に「しようがないな」と処理されていたのが思い出されます。しかし、開業医では、そうも言っておれません。まして、老人ばかり残っている田舎町では、兎も角、解っても解らなくても事態を説明し、「治る、治る」でおし通しています。



▽780 高知市北本町三ー一〇一四七
武井整形外科

武井廉平

(特)

医局を出てから十五年、今じゃ高知の田舎医者、集る患者は五十人、ヨイシヨイシ
昭和三五年暮、父危篤の報にて帰省し、そのまま教室の大先輩畠中卓助先生の許に約六年勤務、昭和四二年四月現在地に開業、細々と且つノンキにやっています。

在局中の不勉強のクセは現在ますます本領を発揮し、毎月一回高知市整形外科医の症例検討会に顔を出す程度にて、満五〇才ともなると老眼鏡？を必要とする友人も多い中で、新聞は勿論、辞書（メッタに見たことはない）の活字も眼鏡のお世話にならずに毎日を過ごしているのも不勉強の賜物かと、自分自身で慰めています。在局当時、悪友？上石兄（その他の先輩の名は灰色とします）達と共に医局の酒は翌日に残さなかつた思い出、地下のヨシコウにツマミ買いに何往復、東三階詰所の氷のアタック等、酒の思い出は絶えません。当時に比べ酒量は半分以下となりましたが、夜のお付合は相変らず、大体の飲会には皆出席です。まあ飲める間に飲んでおこうと言う考えです。
三八才より始めたゴルフも、開始年令の迄までハンデーはなるとおだてられたのが運のつき、昨年暮、6のお墨付を頂戴し、本年中に今一つアツプ、片手のシングルへと自惚れましたが、この夢は酔夢のようです。ハウプトのお墨付でなくて良かったのやら、悪かつたのやら解りません。
人生五〇年といわれたのは昔のこと、ゴルフハンデーのようにには行かなくとも、せめて後二五年、上手におだてて呉れると三〇年をと欲張っています。自分の血圧が高いのか、低いのか計ったことがないので、まだ暫くは長持ちするものと思っっていますか？

畠中大先輩、武田智先生、畠中卓士君と四名の同窓で頑張っているの、同窓の諸先生御来高の節には是非御一報ください。
筆不精の小生、幹事よりの御依頼にてヤット筆をとり、近況の御報告にて責をうめさせていただきました。
教室の益々の御発展を祈ります。

妻 洋子

長男 良憲（土佐高卒、医学部志望中）

長女 勅子（土佐中三年）

次女 映子（小学六年）

▽780 高知市北本町三ー一〇一四七

電話 〇八八八一三ー三〇七四



香川県仲多度郡

満濃町四条六七八

高尾 徹 二

(四十一回生)

開業一年目を迎えて

昨年七月開院式を行ない、診療を開始して一年と三か月が過ぎました。この一年余りをふりかえってみて早いようでもあり、また随分長かった一年のような気がします。岩原先生御夫妻はじめ整形の同窓の方々に遠路はるばるおいでいただき開院式を行なったのが、随分前のような気がしてなりません。何事もスタートが肝心と、この一年ただ夢中で過ごしてきて、後を振りかえってみる予猶がありませんでしたが、ここいらで一度ゆっくり反省の機会を持って、舵が曲っていないかどうか、じっくり考えてみる必要があると思います。開業して医局を離れ、学会とも疎遠になるとつい不勉強になり、最近の話題、知見にもうとくなり、送られてくる雑誌をざっと目を通すのがやっとという現状です。勤務医の時と違って医院の経営、管理、薬剤の購入、税金対策等々、予想しなかったようなことで頭を悩まし、一日の診療がすんでも仕事からの解放感がなく、勤務医の人がうらやましくなったりするこの頃です。小さいながらも一國一城の主として自分の思う通りに腕をふるえる点、自由もあるが、また責任も負担も重くのしかかってくる感じです。

当地区には救急医療の制度が十分できていず、総合病院、公立病院も離れているので、近在の農山村を抱えている当院へは夜昼かまわず救急患者が送られてきて、救急車にベッドが満床だからと言っても何とかなると思うのか、おかまえないしに送られてくる。一日中自分の身体であって自分の身体でなく、全く患者のペースで二四時間ふりまわされているような感じで、「俺も生身の人間だぞ」と叫びたくなることがあります。でもたとえ患者からの要望があっても自分の専門外のものにはなるべく手を出さぬよう、他の病院へ送り、整形外科専門のプライドと守備範囲を頑固に守り通しているつもりです。今まで医局や出張病院で教わったやり方に固執して新しい試みが少なく、進歩がないのを危惧します。慶応の整形の同窓生が近くにいたり、関連病院が近くにあっていつでも気軽に相談できたらなあと思うことが度々です。慶応の学内情報といったら月に一度送られてくる医学部新聞が唯一の情報源であり、年に一、二回でもよいから医局へ顔を出して最近の情報を得たいと考えているこの頃です。

ゴルフもハンディは万年三六で少しやっておりますが、ここ二年間全く山へ行っておりません。近くの満濃池のレイクサイドにゴルフ場がオープンしたので、またぼつぼつ始めてみたいと思っております。同窓生のお立寄りをお待ちしています。近況報告とまでいかないが、とりとめのないことを開業一年目の雑感として述べさせて頂きました。

昭和一八年、父(一〇回生)が高知ではじめて整形外科を開業して以来、小林祥悟先生をはじめとして、松井明先生、武井廉平先生、河野通隆先生、高尾徹二先生の諸先生方に勤務していただく等、随分教室の世話になってきました。昭和五〇年春、高尾先生が開業され、そろそろ息子に帰って来いと言うこと(それまで息子は高岡、塩原、飯田、市川と主として地方を巡業しておりましたが)、三〇数年間父が細々と築いてきた、昨年より急速に沈下しつつある地盤を受け継ぐ決心をし、教室にお願いしてそのご理解を得、ついでにもう一つわがままを通して昭和五〇年九月に岡山大学の整形外科に入室してもらいました。岡山大学は児玉教授、田辺助教以下講師三〇四名、インストラクター三〇四名、レジデント数名でベッド数は六〇余りの、こじんまりとした所帯でそのの医員という身分で、四か月という短期間でしたが働かしてもらいました。主として見学というような感じでしたが、入院患者は二〇三名持ち、外来の義務はなく、児玉教授の Deschlerber というような形で、リュウマチ外来を見ていました。手術はほとんどアシスタントではいり、頸椎の前方固定を二例やらせてもらいましたが、随分緊張しました。私のような異端者にも月給をくれ、慶応では持つことのなかった机まで与えてくださり、暖かく受け入れてくれました。私のような開業寸前のものがこうして来るのではなく、国内留学のような形でレジデントの交流が他大学との間で盛んになれば、お互いに良い刺激になるのにも思ったことでした。

他人の飯を食べてみて、あらためて慶応の良さ、人材の豊富さとか、レジデントの自由潤達というか言いたい放題と言うか、のびのびとした雰囲気を感じました。

五一年一月より岡山大学の関連病院で、五三年開校予定の高知医大の教育関連病院となる高知県立中央病院に勤務し、副院長で自由にやらせてもらっています。



現在父の病院は新築中で、五年一月末に完成予定であり、私も一二月で現在の勤務をやめ一月より父と二人で病院の借金に追われる予定です。

父も七三才という高齢にもかかわらず元気で、仮診療中の病院を一人で診て、暇があれば建築現場を見てまわり、休日にはアユ釣り、ゴルフと多忙をきわめております。生来の筆不生で

ふるさとの原稿も書かないのに、七〇の手習いというか毎日「定礎」という字の練習をしており、病院の完成を心待ちにしています。

高知は東京から二時間の近距離にあり、温暖の地で、魚は新鮮だし、果物も豊富だし、ゴルフも手軽に出来るし、釣りの本場だし、台風をのぞけば、住み良い所です。

今後共いろいろよろしくお願い致します。

海外留学のすすめ

竹 田 毅
(四十七回生)

三木内閣が誕生し、世の中に「青天の霹靂」という言葉が流行していた頃、小生もまた、思いもよらない英国留学をせねばならないハメになった。幼い頃より飛行機と横文字だけはできる限り避けて通り「たとえ天が裂けても外国には行くまい」と固い固い決心をし、かの新婚旅行ですら、同僚が皆鼻の下を長くして海外へ飛んで行くのを横目でにらんで国内の田舎町をうろついていた小生が、こともあろうに英国留学というのであるから、これはもう一大事である。英国に行けばとにかく英語をしゃべらなくてはならないわけであるが、小生にとって、この英会話なぞというものは、相撲取りがクラシックダンスをするようなもので、全くイメージとかけ離れたものだったのである。事実、悪友共は「あの竹田が英国留学!!」などと女性週刊誌の見出しみたいなことを言っただ喜びしたものである。概して人というものは他人の不幸を喜ぶ傾向があるものであるが、それにしても友情というものはない奴らである。また教室の先輩は先輩で「行けばなんとかなるよ、殺されるようなことはまずないよ。」とか「お前がうまく行けばあとは誰が行っても大丈夫。」とか、無責任なことを言う。言う方は勝手だが、言われる方にしてみれば不安がつのるばかりである。出発の日が近づくにつれ、「大地震でも起こって東京が崩壊すれば……」とか「イギリスが、どこかの国と大戦争でもはじめれば行かなくてもすむのに……」とか色々とはかない期待をしたものの、こういう時には時というものは無情に過ぎるもので、結局、何ごともし起こらず、不安九九%、期待一%という何とも情ない心境のうちに日本を離れたのである。

小生が留学した先はリーズ大学医学部の Rheumatism Research Unit とさう研究所で、教室の津布久先生が先鞭をつけた所である。このボスは、Prof. V. Wright とさう、リウマトロジが専門である。氏は自分に八人の子供がありながら、なお黒人の子をもらい子して育てている程の人で、敬虔なキリスト教信者であり神様のような人である。このボスを中心に医師五、六人（内科医、リハビリ医）、工学部の講師をかねる Engineer 二人、それと工学部を卒業後、博士号を取るための研究をしている Research Fellow 数人が主なスタッフであるが、この構成からもわかるように、この研究所は工学部機械工学科とも一身同体で、いわゆる Bio-Engineering、それも関節に関連した研究を主に行なっている。工学部のボスが Prof. Dowson であり、氏を中心にした関節の潤滑に関する研究は有名である。また氏は Tribology とさう語を最初に確立した人でもある。この研究所からは優れた業績が数多く生まれているが膝関節の Bio-mechanics に関して多くの論文を発表し、コードマンの人工膝関節のデザイナーでもある P. S. Walker さん、この出である。小生はこの

スタッフの一人である。B. B. Seedhorn と云う Engineer と一緒に、主に膝関節に関連した研究をしたわけであるが、勉強の話は、話題からはずれるので、またこの次の機会ということにする。

さて、このリーズという町はイギリス中部ヨークシャーにあり、ロンドンから北へ約三〇〇 Km、人口五〇万程の田舎の大都市で、産業革命発祥の地とされている。一般的にイギリスという国は、あまり気候のよくない国とされているが、中でもこのヨークシャーは緯度では北海道より北に位置するため、お世辞にも良いとは言えない。特に冬は最悪で、その日照時間の短いことには閉口する。朝九時頃やつと明るくなったと思うと、もう三時には暗くなってしまい、強風が吹きまくり、一日のうち一度は何の前ぶれもなく冷たい雨がサーッと通り過ぎる。レインコートとコウモリは必需品である。霧の濃いことも御他聞にもれない。しかしこの反面、冬が ажける四月下旬から八月頃までの気候は快適で緑は濃く、バラを中心に花の美しさは格別である。真夏でも汗をかくことはまづないし、夜は一〇時半位まで明るいので、仕事が終わってからでも一ラウンド位のゴルフは簡単にできる。もつとも小生は、知る人ぞ知るゴルフ嫌いであり大の勉強好きであるので、一度もやらなかったことは言うまでもない。

ヨークシャー地方で話される言語はもちろん英語であるが、この地方の英語には独特のアクセントがあり、日本でいえばひどい東北弁といったところである。このため英会話に堪能な人は非常に苦労するらしいが、幸か不幸か小生にとっては、どんな英語であろうと、分からないことには変りなく、このことに関しては何の痛痒も感じなかつたのである。

よく海外紹介のガイドブックに、「英国人は冷くつきあいにくい」と書かれているが、それはどうもロンドン周辺の話であるらしく、この地方には全くあてはまらない。土地柄か人々は誰も彼も皆情に厚く、親しみやすく、とてつもなく親切である。研究所のスタッフも皆、親切のかたまりみたいな人ばかりでかえってこちらが恐縮する程であった。特に研究所の雑務一般すべてを取りしきる Arthur というヨークシャーなまりまる出しのおじさんには筆舌につくせない程の世話になり、いくら感謝してもしきれない。小生と同じように留学していた秋田大の遠藤講師と日本語でしゃべっていると、とんできて「日本語はわからんから英語でしゃべれ」と言い、少し元氣のない顔をしていると「元氣のない顔を見るのはつらいからビストルで撃つ」と言い、なにかと勇気づけてくれる。どこにも良い人間はいるものである。また Seedhorn 氏は、自分がエジプト人で、やはり昔英会話で多少苦労したことがあるせいなのか、小生が一言いい始めると、すべてを理解してしまおうという特異な才能があり、これには大助かりしたものである。こんなわけで、おっかなびっくりリーズに到着した小生は一カ月もしないうちに、不安一勇期待九九勇と豹変したのである。Yes, No, Thank you 以外ほとんどしゃべる能力を持ち合わせない小生が、まがりなりに一年余の英国生活を無事におさえることができたのは、全くこれらの人々のおかげである。

しかし、いつもこういう人がそばにくっついていてくれるわけではないから

会話に関する失敗談は枚挙にいとまがない。一番困ったのは電話である。面と向って話をすれば身振り手振りも出来、相手の表情からいろいろと理解できるからいいが、電話だとこういいうわけには行かない。ある時などは、五分間以上も、ああでもないこうでもない、訳の分からぬ応酬をし合ったところ、結局間違い電話で、相手を怒らせたこともある。それ以来、小生は電話がかかると必ず日本語で「モシモシ」ということに決め、見ず知らずの英国人からの電話は一切これを拒否することにしたのである。

「外国に一年いれば誰でも会話はペラペラになる」ということが言われるが小生に言わせれば、これは全くの迷信である。会話の上達というのは、どうも持つて生まれた才能によるものよりである。生まれつきおしゃべりで、ずうずうしく、恥かしいということを知らない、悪く言えば厚顔無恥な種類の人間は、必ず驚くべき上達をする。教室にもこれに当たる人が何人かいることは御存知の通りである。一方、日本語すらあまりしゃべらず、無口で、良く言えば思慮深い人は、絶対に上達しない。小生が後者に属することは、これまた言うまでもない。

ともあれ一年余の英国留学を終え、今振り返ってみると楽しい思い出ばかりであり、研究のことも含めて実に有意義な留学生活であったと思う。今でも相変らずの飛行機嫌いではあるが、外国嫌いは解消した。

塾祖福沢諭吉先生は、あの時代にすでに広く海外に目を向けるべきことを説かれたと言うが、やはり偉大な人は違うものである。小生も、ここに遅ればせながら、大いに海外留学をおすすめするものである。小生のあまり名誉にらない失敗の数々や、つたない経験が、これから留学をしようとする人や、外国嫌いの人に大きな勇気を与えることになれば幸いである。

終わりに、このような留学の機会を与えてくださった教室の諸先生方、および暖かく小生を迎えてくださった Rheumatism Research Unit のスタッフの皆様、に深甚の謝意を表して筆をおくこととする。



☆同窓会新入会員紹介☆

昭和五十年十一月同窓会において新入会となりました。

満 足 駿 一 君

略 歴

昭和十七年九月二四日生、大阪で出生し幼少時を徳島で過ごす。

昭和四十二年三月 京都府立医大卒

昭和四十五年四月 済生会吹田病院整形外科勤務

昭和四十八年四月 国立療養所村山病院に勤務し、脊椎・脊髄外科の臨床を専攻

現住所… 東京都武蔵村山市中藤三二六〇

家 族… 妻および子供四人

趣 味… バレーボール

新人紹介

昭和五十一年五月入室

石 倉 哲 雄



昭和24年4月2日生

出身地 富山県
 出身校 富山県立高岡高校↓金沢大学医学部
 趣味 マーじゃん、碁、パチンコ
 当科専攻の動機
 今後の抱負
 その他

○臨床専攻
 国立愛媛大学山内病棟、腎臓・腎臓科
 科長 田原 豊彦 科長 藤 隆

昭和五十八年四月
 藤井 立羽 英 治



藤井 立羽 英 治

昭和25年7月3日生

出身地 岡山県
 出身校 岡山操山高校
 趣味 旅行
 当科専攻の動機

適切な治療法を選び実施すれば、それ相当の結果が期待できる点、整形外科は黒白のはっきりした学問であり、やりがいがあると思う。

今後の抱負
 疑問を抱き、それを解明していく姿勢を常に持っていたい。



吹本 武憲

昭和23年1月6日生

出身地 北海道
出身校 札幌南高校
趣味 ねること、音楽
当科専攻の動機
医局のフンイキにひかれて!!



樋口 正隆

昭和26年7月23日生

出身地 富山県
出身校 富山中部高校
趣味 ゴルフ、碁、食えること
当科専攻の動機
学問的興味を探索そうだから



木原 未知也

昭和26年12月15日生

出身地 鹿児島県
出身校 慶応志木高校
趣味 人の聞かない人々のレコード鑑賞
当科専攻の動機
諸先輩が躍動的に働いている姿を見て



松本昇

昭和26年8月4日生

出身地
出身校
趣味

横浜市で生まれ、三か月で東京にきました。
慶応高校

鉄道が好きです。写真を撮ったり模型を作ったり、田舎の列車を見に行くのが好きです。

当科専攻の動機

とにかく外科系が向いていると思えました。それに、人間動けなくなつた時の不幸、それを少しでも良くできたらとそんな気持ちで入りました。

今後の抱負

大きな抱負というより、早く役立つまともな医者になりたいです。その過程で興味をもつたところを深く突っ込んでみたいと思ひます。



水品彰彦

昭和26年7月11日生

出身地
出身校
趣味

神奈川県
慶応高校

当科専攻の動機
テニス、スキー、ゴルフ

ポリクリ最初の整形にて、Dr.坂巻に大変親切に教えていただいたため。

今後の抱負

All mightyのOrthopedistを目ざす予定(予定は未定にて決定に否ず)



根本孝一

昭和26年1月5日生

出身地 栃木県
出身校 宇都宮高校
趣味 音楽、読書



西川雄司

昭和24年9月13日生

出身地 高知県
出身校 土佐高校
趣味 ゴルフ



太田新実

昭和24年12月20日生

出身地 名古屋
出身校 海城学園高校
趣味 ヨット、ゴルフ
当科専攻の動機

特に動機というものは無いが、住みごこちのよさそうな教室であつたため。

今後の抱負
特になし

昭和26年10月01日生

敬 児 味 彦



塩尻 邦彦

昭和25年6月10日生

出身地 横浜市

出身校 都立小石川高校

趣味

車を集めること(トヨタ二、〇〇〇GT、一一七XE)、カメラ、八ミリ

当科専攻の動機 幼少のころよりの希望。

今後の抱負 一人前の医師になること。



添田 修一

昭和24年11月24日生

出身地 兵庫県明石市

出身校 関西医科大学

趣味 スポーツ全般(特にテニス、スキー、水泳)

当科専攻の動機

米国海軍病院インターン研修を通して、Traumaに深く興味を抱いたため。

今後の抱負

整形外科どの分野を専攻していくか未定であるが、Originalityのある事をしたい。

その他 整形外科医であるとともに、いつまでも全身管理の姿勢で

Patientに接していきたく。



菅 沼 淳

昭和26年11月17日生

出身地 神奈川県厚木市

出身校 平塚江南高校

趣味 囲碁、将棋



高田 知 明

昭和25年6月24日生

出身地 名古屋市

出身校 愛知県立明和高校

趣味 なし

当科専攻の動機

他に興味をいだくものがなかったから。



吉井 新 一

(四十一回生)

昭和25年1月3日生

職業書

同窓会幹事

出身地 群馬県

出身校 高崎高校

趣味 自動車

当科専攻の動機

将来を考えて



湯 沢 喜 志 雄

昭和27年3月20日生

出身地 東京都

出身校 慶応高校

趣味 音楽鑑賞、カメラ

当科専攻の動機

特になし

編集後記

昨年に続いて本年も「ふるさと」の発行が出来ましたことを大変うれしく思っております。御協力いただきました先生方および関係各位に心から御礼を申し上げます。

今回は岩原名誉会長、池田会長、泉田教室運営委員長から原稿を頂戴できなかったのが大変残念でございました。

しかし、幹事長以下の漸新なメンバーで、昨年とはまた変わった内容のものを作ることができたように思われます。

幹事長、医局長、卒訓担当の原稿からはいろいろな御苦労の程がしのばれます。幹事会で決定してお願いした「北から南から」では九州、四国で活躍なされて同窓生の御活躍ぶりが目に映るようでございます。

竹田君の「留学のすすめ」も読む程に吸い込まれるような魅力を与えてくれました。

今後、年一回ながら一層充実した良い雑誌が発行されることを期待いたします。

昭和五十一年一月

同窓会幹事

編集者

石井良章

(四十一回生)

脳血流不全に伴う
めまい・頭重感に

脳血流促進剤

アブラクタン カプセル
顆粒
1カプセル中 シンナリジン25mg含有
1g中、シンナリジン100mg含有

【特長】

アブラクタンは、著明な脳血流促進とともに細小動脈の収縮・けいれんを緩解する作用があります。また、緩徐な鎮静作用を示すためとくに高血圧性疾患の治療には効果的です。

【適応症】

脳卒中・脳動脈硬化症・高血圧性脳循環不全・頭部外傷後遺症の脳血流障害にもとづく諸症状の改善

【用法・用量】1回1〜2カプセル（顆粒は0.25〜0.5g）を1日3回経口投与

【包装】カプセル：100、500、1000、5000カプセル
顆粒：100、500g

【健保薬価】1カプセル：23.50円 1g：84.10円

【使用上の注意】

本剤投与により、眠気・薬疹等がおこることがありますので、能書の使用上の注意を熟読のうえお使い下さい

＜水剤にも服用できる＞
顆粒新発売



エーザイ
東京都文京区小石川4



こりびれ
めまい…

高血圧症、動脈硬化症、脳卒中、冠不全の脂質代謝異常および血行障害にもとづく諸症状に。

ユベラニコチネート

作用

1. 微小循環系賦活作用
2. 血管壁強化作用
3. 脂質代謝改善作用
4. 血小板凝集の抑制作用
5. 血中酸素分圧上昇作用

使用上の注意

本剤の投与により、ときに軽度の食欲不振、下痢、便秘などの胃腸症状があらわれることがある。

健保薬価

1cap18.80円／散(1g)34.90円



エーザイ

東京都文京区小石川4-6

